

パレスチナの場所と記憶をめぐる考察
タウフイク・カナアンの痕跡と業績を手掛かりに

Place and Memory of Palestine:
Around Tawfiq Canaan's Traces and His Achievements

田浪 亜央江*
Aoe Tanami

Abstract

This article concerns the difficulty of preserving collective memory of Palestinian society before the Nakba, the Catastrophe wrought on the population by the creation of the State of Israel, as read through the works of famous Palestinian folklorist Tawfiq Canaan.

A former leprosy hospital in Jerusalem has eliminated all traces of its Arab history including its Arab patients and staff. This was the place where Canaan served as director and physician. It is ironic that his legacy here has been completely erased since he was a figure who made great efforts to collect Palestinian traditions, foreseeing that they would be lost or forgotten in the near future.

Still, beyond the hospital, there are more elaborate ways of controlling Palestinian collective memory in Israeli public space. While a Palestinian motif may be presented on the outside, something related to the Nakba or the distinct identities of a Palestinian village are prevented from being expressed, as seen in an exhibition on Palestinian embroidery.

This article highlights Canaan's works, arguing that they have the potential to resist such maneuvers. Additionally, his articles present specific problems of preserving collective memory, such as "Palestinian Arab House." In detailing the ways of building houses, customs related to the home, and living habits, Canaan provides rich information on Palestinian habitations.

We find the paradox of memory in these efforts "not to forget" – that they sometimes bring about selective memory. However, Canaan's works are left open in front of us.

I. エルサレムの「ハンセンの家」と記憶の上書き

「英国委任統治期（1918～48年）、当機関は通常通り活動を続けた。第二次大戦中、職員や備

* 成蹊大学アジア太平洋研究センター主任研究員、Chief Researcher, Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University.
E-mail: tanami@ejs.seikei.ac.jp

品の不足に苦しんだが、ハダサー病院の援助を受け、当施設は機能し続けた。1950年、当機関はイスラエル保健省に移管され、その名はハンセン病院へと変わった。

これは現在の西エルサレムのタルビヤ地区にあるかつての「らい病院」¹で、現在「ベート・ハンセンの家」の名で呼ばれている建物²の内部に掲示されている解説パネルの一節だ。かつての歴史を伝える資料室とされている一角のどこを見渡しても、わずかな展示物と簡潔な内容のパネルしか見出せないのだが、この一節のぞんざいさは、特に衝撃的である。

1917年からパレスチナの占領を開始した英国は同年ユダヤ人組織に対し、パレスチナでの「ナショナル・ホーム」建設を支持する「バルフォア宣言」を出した。1920年から正式に開始された英国委任統治下でパレスチナへのユダヤ人移民が急増するなか、パレスチナ社会は激変し、次第に混乱の度を高めてゆく。パレスチナ統治に行き詰った英国は国連に解決を委ね、国連総会はパレスチナをユダヤ国家とアラブ国家に分ける「パレスチナ分割案」を決議する。英国がもともととの予定を前倒ししてパレスチナ統治を終了させた1948年5月14日、「イスラエル独立宣言」が読み上げられ、同日、アラブ諸国とイスラエルの間で戦争が始まった。すでにそれまでに40万人から50万人のパレスチナ人が、イスラエル軍の前身であるハガナーによる追放作戦によって、難民とされていた。

こうしたパレスチナ情勢の激動のなかで、タルビヤ地区の「らい病院」のありようは激変した。イスラエル保健省に移管されたとか名称が変わったなどという次元では、決して済まない話なのである。

タルビヤ地区の「らい病院」は、まだこの地域がオスマン帝国の一部であった時期である1873年、エルサレム総監カーミル・パシヤによって建設が決定され、1887年に完成した。20世紀



中庭から見た「ハンセンの家」
(田浪撮影)

紀に入ってからもしばらく、大シリア地方唯一の「らい病院」であった（現在の「ハンセンの家」の案内文では「中東唯一の」という表現がとられている）。ベッド数は60で、1867年からパレスチナで活動を開始していたモラヴィア兄弟団（モラヴィア教会）によって運営されていた。開設当時の患者の出自や性別等に関する情報は不明であるが、当時の人口比からすれば、大多数がアラブ人ムスリムであったと考えてよい。

ここで焦点を当てたいのは、「パレスチナ分割」決議（そのなかでエルサレムは、「国際管理」都市になることが謳われていた）が成立した1947年11

11月以降の状況である。さしあたり筆者の手元にあるのは、モラヴィア教会の事業実施団体である「福音促進信託協会（Trust Society for the Furtherance of the Gospel）」の出納局長の名で、パレスチナ高等弁務官宛に送られた1948年1月7日付の文書と、その返信だ。冒頭、委任統治政府

¹ もとの正式名称は、ドイツ語で「イエスによる救済」を意味する Jesus Hilfe であり、「らい病院」は通称である。明らかに差別的な文脈で用いられてきた「らい病」の語を使用することについては慎重であるべきだが、ここでは原文が leprosy（ヘブライ語で צרעת）の場合、あるいは文脈上その語が当てはまる場合には、歴史上の文脈を明らかにするために「らい病」の語を用いた。

² イスラエル建国後に同国保健省に移管されて「ハンセン病院」となった後、患者数の減少のなか2000年以降は外来診療施設に変わり、2009年にハダサー病院の部局となり、その機能は他の場所に移動された。残された「ハンセン病院」の建物は文化遺産指定され2011年にエルサレム市の管理下に置かれた。現在「ハンセンの家」の大部分は、アート関係のNGOが展覧会を行うのに利用されている。

から「らい病院」に対して1700ポンドの助成金が与えられたことについての感謝の意が伝えられ、次に一転して切羽詰った心情を伝える言葉が続く。「来るべき英国軍のパレスチナ撤退について、当院の看護婦たちは大いなる不安をもって見ております。我々も同様に、いかなる政府が現在の行政を引き継ぐのかを懸念の目で探っております」。「もしも助成が継続され、らい病院が国の保健サービスのなかで公認された地位を保ち続けることが確認できれば、曖昧な現状に引き比べ、将来の業務についてはるかに確固たる意識をもてることでしょう」[Israel State Archive]。そして政府が困難な任務を抱えているさなかではあるが、何らかの情報があればぜひ知らせたいと懇願している。それに対する返信はM. H. Dormanという役人からのもので、残念ながら英国撤退後のエルサレム行政についてはいかなる情報も与えられない、と慇懃ながらそっけない返答がなれている [ibid.]。

今日我々の知る歴史的事実は、1948年の戦争の結果、イスラエルは「パレスチナ分割」決議の内容に違反するかたちでパレスチナの77パーセントの土地を支配下に入れ、国際管理下に置かれるはずだったエルサレムは、西側をイスラエルが、東側をヨルダンが占領するかたちで休戦になったということである。タルビヤ地区は、イスラエルの支配下に入った。Tamariは次のように述べている。「1948年の戦争中のタルビヤのらい病院のアラブ人とユダヤ人らい病患者の分離は、エルサレムおよびアラブ・イスラエル紛争の年代記において、決定的な瞬間を記した」。「1948年のエルサレムにおける戦争によって、約80万人のパレスチナ人とともに、アラブ人のらい病患者全員が東側に追放されたことは、歴史の大いなる皮肉であった」[Tamari, 2009: 94]。

冒頭で紹介した解説パネルの内容が衝撃的であるのは、こうした出来事の重み、その背後に折り重なる膨大なディテールが、簡素で粗雑なテキストによって上書きされているためだけではない。「らい病院」からのアラブ人患者の追放の詳細についてほとんど資料がないとTamariが述べているように、現在も歴史的な事実が「隠されている」というよりは、出来事の所在そのものがほとんど知られないまま闇に葬られ、もはや回復する手立てがないことが突きつけられるからである。筆者はそのことを認識しつつもイスラエル国立公文書館^{アークカイブ}に向かい、そこで見出した関連資料の一つが、上述のらい病院側と委任統治政府側のやりとりの文書であった。

筆者はまた、イスラエル建国からおよそ1年後の1949年5月9日のPalestine Post 紙において、一人の記者によるタルビヤの「らい病院」訪問記を見つけた。1906年からここで働いていたという70代のデンマーク人のシスター Ogelineがインタビューに答えている³。それによると、この当時の入院者数は24名、うち13名がユダヤ人（うち女性5人）、11名がアラブ人（同3人）である。記者はOgelineとともに中庭に入り、そこで数人のアラブ人患者が、陽の当たる壁に背をもたれたり、水タバコを吸っていたりするのを目にしている。つまりTamariが書いているように、アラブ人患者たちが1948年の戦争のさなかに一気にここから追われた、というわけではないということが少なくとも分かる。事態はいっそう複雑であったのだ。

1950年、「らい病院」はユダヤ民族基金の手に渡り、イスラエル保健省の管轄下に置かれる。ユダヤ人患者だけがイスラエル政府の医療制度に入り、アラブ人患者の立場は一切保証されることはなかったであろうし、モラヴィア教会に属する看護婦たちの立場も、同様のものだっただろう。この時期について、最近のモラヴィア教会のニュースレターの記事は「政治的な紛争と先行き不明状態のなかの、不安的な時期であった」と伝え、さらに1953年になって、15人の

³ ここでは割愛するが、この記事ではパレスチナのハンセン病患者を取り巻く当時の状況に触れられており、たいへん興味深い。（イギリス委任統治下の）パレスチナではハンセン病患者を隔離する法は存在しなかったと伝え、また患者は囚人ではなく、一定の条件のもとに彼らが町に出ることを認めている、という趣旨のシスター Ogelineの発言を引用している。

アラブ人患者が二人の看護婦に付き添われながら、東エルサレムのシルワーン村にある、古く狭い療養所に移動したと述べている⁴ [Moravia Archive, 2010]。土地とユダヤ人だけをイスラエル国家に組み込みアラブ人はできる限り追放するという、イスラエル建国にあたっての原則を、建国から5年後に、この国は「らい病」患者たちにも適用したことになる。イスラエルは1949年、「可能な限り早期の難民の帰還」を決議した国連総会決議194号を受け入れることを実質的な条件にしながら国連加盟を果たしたが、アラブ人「らい病」患者の追放はむしろ、国際社会に向けた態度表明とは完全に矛盾する措置であった。

II. タウフィーク・カナアーンと「らい病院」

筆者にとってPalestine Postの記事が注目に値するのは、1949年の時点でもここにアラブ人患者がいたという事実を伝えているからだけではない。ここに「カナアーン博士」の名前が、かろうじて登場しているのである。彼は1919年から、この「らい病院」の院長の立場にいた人物だが、1948年の戦争中、エルサレムの自宅が直接攻撃を受けたため、家族を連れて旧市街へと避難した。「らい病院」のあるタルビヤ地区はイスラエル領内に組み込まれてしまい、再びそちら側に戻ることは出来なくなってしまったのである。この記事はカナアーンについて、わずかにこう言及するばかりだ。「クリスチャンのアラブ人、カナアーン博士に代わって、現在〔ユダヤ系の〕ハダサー病院⁵の医師が患者を診ている」。

タウフィーク・カナアーン（1922 - 1964）の名前は、現在医師としてよりも、ナクバ以前のパレスチナにおいて、フォークロアや民衆信仰の研究を行った人物として知られている。オスマン帝国時代末期から英国委任統治期、そしてイスラエル建国後のパレスチナにおいて、これだけ長期間、幅広い社会的・文化的活動を行なった人物は、ほかにそう見当たらない。彼は当時パレスチナに数少なかったアラブ人内科医であり、自宅を診療所として患者の治療にあたったほか、いくつもの病院の運営に関わり、1944年からパレスチナ医療協会の初代会長をつとめた。自宅での診療や訪問診療に加え、1923年からドイツ病院の内科医療局長に就いたカナアーンが「らい病院」にどこまで深くコミットすることが出来たのかは不明である。しかしモラヴィア教会によるレポートの中の次のような一節は、社交辞令ばかりではあるまい。「我々の医師であるカナアーン博士は、我々の患者を救うために最大限の努力をしている。自分を救うものがほとんど何もないと知り苦しんでいるのはその患者だけでなく、らいを治療するにふさわしい薬をいまだ手にしていない同医師もまた苦しむのである」⁶ [Trust Society, 1946]。上述のPalestine Postの記事が伝えているような「らい病院」の一定の開放的雰囲気が、院長であったカナアーンとの関与のなかで作り出されたと考えるのは、好意的にすぎる想像だろうか。

⁴ 1960年にラーマッラーに病院が建てられたが、患者数の減少に伴い、1974年以降は障害児の受け入れ施設となり、今日に至っている。

⁵ ハダサー病院を運営するハダサー医療センターは、1912年「ハダサー（米国女性シオニスト機構）」によって設立され、1918年に最初の病院がエルサレムにオープンした。現在約1000床をもち、ヘブライ大学と提携している。ハダサーは米国人女性シオニスト活動家ヘンリエッタ・ゾルド（1860-1945）が設立した団体で、フェミニズム、女性のリプロダクティブ・ライツ、ヘルスケア促進を掲げ、同時にアメリカ・イスラエルの関係強化の推進役にもなっている。

⁶ 1943年にプロミンを用いた化学療法の効果が報告されたが、その治療法が世界的に広まるのは1950年代である。[犀川ほか、2012] なおNashefによれば、カナアーン自身は当時一般的だった大風子油による治療を行ないつつ顕微鏡検査にも携わり、「どれほど小さくとも回復の可能性があれば、らい病院で治療された」と述べているという。[Nashef, 2002: 20]

ともかくもカナアーンは、1919年から20年近くにわたり、この病院の唯一の医師であった。だが、「ハンセンの家」の展示からアラブ人の痕跡が一切消されているなかで、カナアーンの痕跡もここで伺うことはまったくできない。1900年代、1940年代、50年代、60年代、80年代と計



タウフィーク・カナアーンと妻マルゴット（1915年）[Tamari, 2009: 94]

5枚、「スタッフ」というキャプションの下に白衣を着た人物たちの写真が一枚のパネルに小さく載せられており、カナアーンの時代の写真がないことからしても、カナアーンほかアラブ系の人物の姿を意図的に出さないようにしていると判断せざるを得ない。

カナアーンは医師としての仕事の合間にパレスチナの伝承や風習について研究し、1920年以降、*Journal of Palestine Oriental Study* を主な舞台に、欧米の考古学者や聖書学者らに混じり、ドイツ語や英語で数々の論文を発表した。1947年末からシオニストの組織した軍によるパレスチナ人の追放作戦が開始され、多くの有力者たちがパレスチナから避難するなか、彼はドイツ人の妻とともにパレスチナに残ることを選んだ。自宅が攻撃を受け、家族を連れて避難したのちに自宅は略奪に遭い、高価な家具類がすべて持ち出されたあと放火された。彼が書き残した未刊行の論文や書簡、資料の類はすべて失われたのである [Mantoura, 1998: 14]。

筆者はカナアーンの仕事のなかで、パレスチナの民衆信仰が多文化性の表現として捉えられている点に特に注目し、別稿で論じた [田浪, 2016]。「文化」と「宗教」が対立しているかのような構図、すなわち「多様性や自由を本義とする文化活動」と「不寛容で閉鎖的な、文化活動に敵対するイスラーム」といった図式が作られてしまっている現在のパレスチナにあって、そもそもそうした二項分類の存在しなかったパレスチナ社会の宗教＝文化状況をつぶさに記録に残したというだけでも、カナアーンの業績の今日的価値は高いと考えている。

またナクバの過程で自宅や自身の所有財産を失う一方で、カナアーンはパレスチナの人々の精神世界のありようを伝えるコレクションを残すことに成功した。貧しい農民患者を診察すると、報酬の代わりに彼らが身につけている護符をお礼として受け取るようになり、次第に意識的にその意味や役割について農民たちから聞き取り、丹念に記録を残し始めていたのである。戦争の開始と略奪の危険性を予測し、約1400点におよぶこの膨大な護符のコレクションだけは、国際機関に預けていた。現在これは、タウフィーク・カナアーン・コレクションとして、ビールゼイト大学に保管されている⁷。

一方で「ハンセンの家」の伝える歴史のなかでは、患者が主にアラブ人であったことばかりか、そもそもイスラエル建国までパレスチナ全土がアラブの地であったことさえ、一切分からなくなっている。ナクバ以前のパレスチナの社会のありようを記録し、生き生きと今日に伝えるカナアーンの仕事を振り返り、カナアーンが抱いていたパレスチナの文化に対する愛情や敬意を想像するとき、当のカナアーンがそこにいた現場であるはずの「らい病院」で、その痕跡が完全に拭い取られていることの皮肉と不気味さは、いっそう際立つように思う。

⁷ 1998年10月から99年2月にかけて、ビールゼイト大学でこのコレクションが公開され、カタログが刊行されたが、残念ながらその後一般の目に触れる機会はないようである。Ya Kafi, Ya shafi... The Tawfik Canaan Collection of Palestinian Amulets. Birzeit University.1998.

Ⅲ. アートによって隠蔽される〈村〉の記憶

他方で近年、イスラエル建国の負の記憶を浮かび上がらせない範囲で、アラブやパレスチナ、イスラームを自国の文化や歴史に取り込もうとする動きは、むしろかなり広がっている。ここでは、アラブ・パレスチナの文化の一面について語ることで別の何かを語らずに済ませ、結果的に対象のアイデンティティを都合よく操作するという複雑な手続きが行われている。ここでいったんタウフィーク・カナアーンを離れ、そうした状況の一事例を見ておきたい。

「ハンセンの家」の隣接地区で2015年に開催された、パレスチナの刺繍に関する特設展「各地の刺繍 女性・記憶・アイデンティティ」⁸は、アラブの記憶の痕跡を完全に抹消した「ハンセンの家」とは一見きわめて対照的だ。副題は「パレスチナ人の衣装 クリッドマン・コレクションより」となっており、メイン・タイトルのなかではないものの「パレスチナ」の名が明記されている。刺繍はパレスチナの伝統文化の筆頭に挙がるものだが、70年代以降のパレスチナ文化復興運動のなかで、とくに絵画のなかでは頻繁に描きこまれるモチーフとなり、ナショナルなシンボル性を帯びるようにもなった。現在でもパレスチナに関わるメディアや商品に頻繁に使われるとともに新しいデザインが開発され、販売ルートも多岐に渡り、競争も激しくなっている。したがってイスラエルの公共施設でパレスチナの刺繍展が開かれることそれ自体が、本来大きな可能性を持ちうるものである。

はじめの解説パネルには、「1948年の英国委任統治の終わりまで、パレスチナのアラブ人は、沿岸部の平地、西部、山間部、中部、北部地域の800以上の村々に住んでいた」とある。1948年のイスラエル建国とせずに「英国委任統治の終わり」としているのは、イスラエル建国と「800以上の村々（の消滅）」が結びつくことを避けるためであろうが、ともかくもパレスチナのあちこちにアラブ人が住んでいたことには触れているのだ。アラブ性をすべて消し去っている「ハンセンの家」の歴史観とは大違いであり、ヘブライ語の下にアラビア語、その下に英語の説明が配列され、訳文も簡略化されていない（「ハンセンの家」の解説パネルは、ヘブライ語および英語のみ）。

しかし、全体のパネルに目を通すと、はっきりとある傾向が浮かび上がる。例えば、「中央平原沿岸部の衣装」と題する解説の全文は、次のようなものだ。「ベイト・ダジャンは19世紀、織物と刺繍の名高い中心地で、他の多くの村に影響を与えた。ベイト・ダジャンの婚^{ジン}礼^ラドレスは青い綿で作られ、袖の短いものだった。胴体正面は、赤い絹の糸の刺繍と赤、黄、緑の絹のキルトで飾られている。普段着は白か藍色のリネンで作られており、そのカットは、二つの羽に似た細い長短の袖を除くと、ユダヤ山地のものと似ている。ベイト・ダジャンの女性は頭に小さな刺繍の施された被り物（「ダマーダ」、「フーカー」、「サッファー」）をしており、顎の下で結んだ。被り物の後ろに結び付けられた長い二本の紐（「ラファーイフ」）は、髪の毛を隠すために使われた」⁹。

イスラエルの公共の場で、アラブの文化に関するここまで詳細な説明を目にすることは通常ないため、一瞬ひょっとして丁寧な解説内容だとさえ思える。しかしこれでは仮に「ベイト・ダジャン」

⁸ カタモン地区にある「イスラーム芸術博物館」の特設展として開催された（2015年7月から2016年2月）。「イスラーム芸術博物館」は「最初のユダヤ系ロンドン市長」Sir David Lionel Salomonsの娘で社会事業家のVera Bryceによって1978年に設立された私設博物館。イスラエル観光省HPを参照（<http://www.goisrael.com/>）。なお同博物館のある一帯は大統領公邸やエルサレム劇場などのある高級住宅街である。

⁹ ヘブライ語、アラビア語を比べながら訳出した。英文はアラビア語からの翻訳と思われるが、誤訳と未訳箇所が多少散見される。

ではなく他の村の名前が入っていても分からないだろう。ペイト・ダジャンの場所を示す地図は、どこにもない。確かにペイト・ダジャンは刺繍に関して名前の知られた村であり、またジャッファ地区でもっとも大きな村の一つだったが、一般的には現在まったく知られていない地名である。また、パレスチナの刺繍展を企画するキュレーターなら当然目を通すはずの基本資料に書かれている次のような情報は、一切用いられていないのである。

——19世紀の後半、開墾した土地の一部の所有を認める土地法改正がインセンティブとなり、ペイト・ダジャンではオレンジ栽培が広がった。また19世紀末にはエルサレムとジャッファを結ぶ鉄道や幹線道路の建設に従事する労働者によって現金収入が増大した。

——ペイト・ダジャンの刺繍が知られるようになった背景には、こうした好調な経済状況と、道路建設による利便性の向上により、この村の市場が近隣の村から買い手を集めるようになったことがある。

——1882年、パレスチナ最初のシオニスト入植地リション・レツィヨンが近隣に建設され、ここへ働きに出る者もいた。

——ペイト・ダジャンの婚礼ドレスは前部に实用機能のない深い切れ目の入ったデザインで、そこには明らかに性的な暗喩が込められていた。第一次大戦後、帰還兵たちのあいだに意識の変化が起こり、婚礼ドレスのデザインを恥ずかしいものだと見なすようになったため、これは1920年代に廃れた。

——代わりに1930年代に新たに登場したのはナアニーと呼ばれる切れ目の入っていないドレスで、婚礼ドレスのように広い面に刺繍が施されたものでは無く、一部に刺繍を入れたものである。刺繍のデザインはいつそう洗練されたものが求められ、果樹園の防風林に使われた糸杉の木の花のデザインが好まれた。[Weir, 1989: 203-239] [Kawar, 2010: 227-245]



ペイト・ダジャンの^{ジッフラヤ}婚礼衣装
[Weir, 1989: 212]

このようにペイト・ダジャン村一つをとっても、その刺繍の背景にはさまざまな歴史的事実が存在することが分かるが、そうした側面はこの刺繍展の解説パネルからは排除され、衣装の様式に関わる説明だけが饒舌に語られているのである。これは、ラーマッラーやガリラヤ地方など、場所を特定し、そこでの「典型的」な様式を説明している他のパネルすべてに共通している姿勢である。一般的に言えば、衣装や装飾品に関する展示において、素材やステッチ、布地の色や種類、意匠などアートの側面に限定した解説が行われるということはむしろありうるだろう。しかしここでの場合、純粋に刺繍のアート性を追及するためにテーマが限定されたのではなく、それは刺繍を生み出したパレスチナの具体的な村や町の記憶への言及を回避するために残された選択肢だったと言えるのではないだろうか。

さらに言えば、ナクバに関して一切触れないというイスラエル国内における暗黙のガイドラインを外すならば、次のことも当然付け加えられるべき情報である。1948年にイスラエル建国に伴うパレスチナ人の追放作戦によって、刺繍で名を知られたペイト・ダジャンの住民およそ5000人は、ガザやヨルダンへと追放された。そのあとにはベート・ダガンというイスラエルの町が建てられ、イエメンや北アフリカからのユダヤ人移民が住んだ。ペイト・ダジャンの人々は、難民の状況にあっても彼らの伝統文化を残す努力を怠らず、現在も刺繍製作を続けている。

展示の最後の解説パネルは、次のような文章で終わっている。「女性の刺繍は女性特有の言語

を生み出す。装いによって示される事柄を女性が選び取ることで、女性のアイデンティティや、個人的・経済的・社会的な位置づけを示す複雑な言語である。／今日、これら刺繍の施された服装は、歴史的地理的なアイデンティティを反映させる、パレスチナ人の過去のシンボルだと考えられている。イスラエル建国後いくつもの村で、伝統的なアートの遺産を保持し、家庭の経済を支えるため、女性の刺繍家たちの支援組織が作られた」。

もっともらしい文章ではあるが、まず前半部で刺繍が女性のアイデンティティにのみ結び付けられているのは、意図的な操作であろう。刺繍が村ごとに異なった色やデザインを持ち、村のアイデンティティを表現していることはパレスチナの刺繍に関して必ず言われることである。それが逆に陳腐でステロタイプな言説になっているという問題意識はありえるだろう。しかし女性の「個人的・経済的・社会的な位置づけを示す」という記述は服装一般に言えることで、刺繍の特性を何ら表わしていない。

後半部には歴史的地理的なアイデンティティという言葉が使われているものの、それは「過去のシンボル」であるという。「イスラエル建国後」に唯一ふれた一文も、「伝統的なアートの遺産」の保持と収入獲得手段のための刺繍であって、現在刺繍がナショナルなシンボルとなっている側面は当然ながら無視されている。ここでパレスチナ人の土地や固有の場所に結びついたアイデンティティは〈女性〉へと抽象化され、現在の営みは過去の〈記憶〉へと変えられているのだ。

IV. タウフィーク・カナアーンと「パレスチナのアラブ家屋」

カナアーンに話を戻そう。パレスチナの〈場所〉と〈記憶〉をめぐる本稿での議論に引きつけて言及すべきは、*Journal of Palestine Oriental Study*に二回に渡って掲載された「パレスチナのアラブ家屋 その建築様式とフォークロア」(1931-32、以下「アラブ家屋」)である。残念ながらカナアーンは、そのオリエンタリスト的な語彙や、執筆当時のパレスチナにある伝承や風習をことさら聖書の記述内容と結びつけようとする記述のために、現代の論者から必要以上に低い評価をされるきらいがある。その点についてはさらに今後別に論じたいが、少なくとも「アラブ家屋」については、家屋の建設プロセスや構造、建築技術や労働のありようが具体的かつ詳細に記録されているという点で、カナアーンの他の論文に対するのと同様の批判をこれに向けるのは的外れであろう¹⁰。なるほど「一般的に言って、現在のパレスチナの人々は、古代に通常そうであったのとあまり変わらない様式で住んでいる」[Canaan, 1931: 225]というように、「オリエントの不変性」といった典型的なオリエンタリストの捉え方をなぞった記述は存在する。家の機能や家に関わる伝承についての記述のあとに、聖書上の類似した箇所についてわざわざ註が加えられてもいる。学術趣味的であるかもしれず、現在の目で見れば確かに余計な記述だが、決してそれが主要なテーマになっているわけではない。

「アラブ家屋」の前半はカナアーンの論文の中では際立って技術面の記述に力の割かれた箇所であるが、後半は家のもつ社会的機能、家と村との有機的な関係へと焦点が移ってゆく。人々が自分の家に住んでいると信じ怖れる霊さえも、その場所にもとから住んでいたものであり、

¹⁰ Fuchsはカナアーンの「アラブ家屋」について、グスタフ・ダルマンの*Arbeit und Sitte in Palästina*, 1928 (『パレスチナにおける労働と習俗』)の「家」章と並び、パレスチナの伝統的家屋に関する「役立たずの」古典だと延べ、筆者が建設に関する知識を持っておらず、もっぱら聖書や考古学、フォークロアへの観点からこのテーマを扱っていることを酷評している。ただしFuchsは「アラブ家屋」の冒頭部分の記述にしか言及していない。[Fuchs, 1998]

近所の人たちを交え、生贄を捧げることによってなだめられる存在である。カナアン自身の関心がもともとフォークロアにあるのは事実だが、パレスチナのアラブの家が近隣の人々とのコミュニケーションの場であり、その住民と村とを結びつけるものである以上、記述の上からも必然の流れであろう。

「パレスチナの西欧化がひじょうに早く進んでいるのは確かであり、多くの村々で西欧の建築方式が導入され、古いオリエンタルな方式が次第に廃れている」[ibid.: 231]。カナアンはこうした認識のなかで、ともかく今のうちに、出来るだけ正確にパレスチナの伝統的な社会のあり方を記録に残すという点のみを心がけて、この「アラブ家屋」を書いたはずだ。ユダヤ人移民の急増によってパレスチナ社会が激変していることを認識しつつも、ナクバのような出来事が起こるとは、誰が予想しただろうか。しかし今日我々がこの論文を読むさいには、ここで記録されているようなパレスチナの家屋の多くがナクバのさなかで全村民追放の直後に爆破されたり、のちにユダヤ人移民者によって占拠されたり、あるいは半壊状態で現在のイスラエルの町の片隅に残されていること、つまりここに描かれている世界の多くはナクバによってすでに失われてしまったのだという事実をつねに確認させられることになる。

例えばパレスチナの山間部の家屋に用いられる代表的な石7種の名と特徴が記述されている箇所がある。ミズイー・ヤフディーと呼ばれる石灰岩のうち、黄色のものはハジャル・ヤースィニー [ヤースィーンの石] と呼ばれており、デイル・ヤースィーンで産出されていることを示している、という。現代の読者なら、当然にも1948年4月9日にデイル・ヤースィーンで起きた虐殺¹¹のイメージがすぐに頭に浮かぶであろうし、さらにはこの村の男性の多くが近隣の石切り場で働いていたこと、その石切り場が虐殺現場の一つにもなったことなども思い起こされよう。現在デイル・ヤースィーンと言えば〈デイル・ヤースィーンの虐殺〉であって、この出来事以前の通常の村の暮らしの記憶に対し、一般の意識がほとんど喚起されてこなかったことに、改めて気づかされるのだ。

カナアンは客観的な観察と描写に徹しており、彼はパレスチナの特に貧しい農民の家屋は決して居心地が良いわけではないということを率直に伝える。煙突や窓もないため、火をたてればその煙が目や鼻を痛ませ、昼間でも暗い。「簡素なタイプの農民の家の内部を観察すると、人間がどうやってこのような環境でいられるのかという驚きが生じる。西洋では当たり前のあらゆる快適さを欠いているのだ」[Canaan, 1932: 68]。西洋人のオリエンタリストなら、こうした感想をそのまま述べるに留めるかもしれない。しかしカナアンは、住民たちが屋上や入り口、中庭で長時間過ごしているからだという方向に筆を進める。暑い季節は屋上で寝るし、近所の人とのあいだで屋上から声が交わされ、しばし会話が続いたり、近所の不幸の知らせが屋上からアナウンスされたりする。日よけのために蔭を這わせた格子状の日陰が作られずれば、穀物などの一時置き場にもなる、という具合に、屋上一つとっても多様な社会的機能を担っている。このくだりを読むと、現在のパレスチナ人の一般の家屋はもとより、難民キャンプのなかでさえそうしたありようが一部再生産されていることに気がついて、筆者には微笑ましくさえ感じられる¹²。このように「アラブ家屋」は現在、執筆当時のカナアンが意図しなかった読まれ方

¹¹ ハガナー [イスラエル軍の前身] による組織的なパレスチナ人追放作戦のなかで起きた虐殺のなかでも、もっともよく知られているものの一つ。144軒の家屋のあるこの村にユダヤ兵が押し入り、無差別にマシンガンで砲撃し、93名が虐殺された上にその遺体は損壊された。女性多数がレイプされ、生き残った村民たちはエルサレムまで徒歩で行進させられた。[Pappe, 2006]

¹² 1970年代以降のパレスチナ文化復興期の代表的なフォークロア研究者であるニムル・シルハーンは、『パレスチナフォークロア百科』の「庶民の家屋」項で、国連からテントや一部屋分の資材を与えられた



www.palestineremembered.comに投稿されている数多くの写真の一つ。1948年撮影の、デイル・ヤースィーンの家だという。

をされていることになる。

ナクバを経た現在、パレスチナ人の〈家〉は一般に、具体的な場所や建物というよりもシンボリックなイメージとなり、とりわけナショナルな記号として機能している。帰還の日を待ちわびる家の持ち主によって保持され続ける〈鍵〉は、絵画や写真のモチーフとなったり、さまざまなイベントで繰り返しシンボルとして使われたりするなかで、しばしば陳腐な表現ともなっている。しかしパレスチナの家々の記憶がナショナルな記号ではなかった時代にカナアーンが記録したのは、〈家〉を作るために当時の人々が持っていた技術や社会関係、

〈家〉の資材を生み出すパレスチナの土地の固有名や、それと結びついた石の名称、〈家〉の恐ろしさ暗さ、不快さといった側面、また〈家〉のために人々が提供したとてつもない労力や手間、であった。ここには決してシンボリックなイメージに回収されることのない〈家〉、理想化されようのない〈家〉があり、それがいかに深みある記憶を刻んだ存在なのかを読み取れる。

それは1934年生まれでパレスチナの北部ソフマータ村出身のムハンマド・ハッシャーンの自伝「北の境界線」の一節とも重なる。ハッシャーンが幼かった頃、一家は借家暮らしで、約3年間は教会の敷地内の家に住んでいた。そこに住みながら、ハッシャーンの父親は村の中心部に近い「ハサン・ムサー」という区域に土地を購入し、新しい家の建築の準備を始める。父親は二頭のロバを使いながら、石切り場から家の建設予定地まで石を運び続けた（さすがに自分で石を切り出すことはなかったようであるが）。「父は建物の基礎を深さ約1.5メートル、幅にして75センチ掘った。まず岩盤に届くまで掘ることが原則で、建物は必ず岩盤の上に建てなくてはならない。掘った基礎の上に、石と、石灰と粘土のモルタルを入れた。地面の高さに近づいたところで、建物本体の建築が始まる。親方はサファド出身のグヌームという男で、弟子の若者が1人いた。（中略）親方と弟子には食事を無料で提供するのが普通だったが、グヌームは自分で食事を作るから、代わりに日当を増やすよう要求した。こうして談判は成立したのだが、にもかかわらず母は、食事を毎日用意していた」[خشان, 2012: 18]。こうした具合に家が建てられるまでの記述が続く。これはハッシャーンの7歳の頃の記憶であり、その記憶力の良さはもちろんのことだが、シオニストの軍によりソフマータが攻撃を受け、彼の一家がそこから離れざるを得なかった家は、決して単なる不動産などではなかったことに気づかされる。

こうした記憶はしかし、ナクバの記憶を中心とするパレスチナの〈集団的記憶〉のなかでは場所を得にくい。2014年10月18日、成蹊大学で「パレスチナ難民のオーラルヒストリーを聴く」と題してハッシャーンによる講演会が行われたが、このような場では、パレスチナ人の普遍的な歴史経験を語る事が不可避的に求められる。ハッシャーンは自分が直接経験していない伝聞による出来事や歴史的経緯の説明も加えつつ、パレスチナ人の〈集団的記憶〉としてのナクバに至るプロセスを語ることで、場に応じた自身の役割を果たした。ソフマータが攻撃を受け、レバノンに逃れるまでについての証言は彼自身の固有の経験と記憶に依った詳細なものだったが、繰り返し語られてきた証言に必然的ともなうものとして、定型的な語り口を感じさせた。

パレスチナ人たちはナクバを経験してこそ、パレスチナの過去の歴史やそこにあった日々の

難民たちが、自力で建て増したり家を建てたりし、また果樹を植えることでかつての暮らしぶりに類似した環境を生み出そうとしていることに言及している [سرحان, 1977: 133]。

暮らしのかけがえのなさを実感し、その記憶を「忘れない」ためにさまざまな手段で記録の発掘、収集、記録を行ってきた¹³。そのなかでとりわけオーラルヒストリーの聞き書きは必然的に、ナクバの経験を中心に蓄積されてきた。その重要性はまったく否定すべくもないが、一方でハッシュェーンの膨大な自伝全体に目を通せば、きわめて当然のことながら、ナクバの経験だけがパレスチナ人の記憶のすべてではなく、その経験だけがパレスチナ人の現在を形作っているわけではないことに気づく。というよりも、ナクバの記憶に回収されないパレスチナ人の生活や文化の奥行きある記憶を回復することこそが、パレスチナ人の〈集団的記憶〉に生命を与えるのではない。

分析的な観察眼を動員しながらパレスチナの家屋やそれに関わる伝承を観察・記録したカナアーンの残した仕事は、ナショナルな記憶のフィルターを通して再構成されたパレスチナ人の記憶とは異なる記憶を思い起こすさいにそれらを裏付け、それらに深みとニュアンスを与えてくれる。パレスチナ社会における記憶とネーションの関係について批判的に言及している文脈の中で Benvenisti は、イスラエル人によるものであれパレスチナ人によるものであれ、「風景のナショナルライゼーションを拒否する者は、カナアーンの記述を悲しみの情でもって、あるいは少なくとも消えてしまって戻らないこの無垢で絵画的で汚れていない世界へのノスタルジアとともに読むしかない」と述べている [Benvenisti, 2000: 253]。しかしとりわけこれまで述べてきたような状況のなかで、カナアーンの残した仕事を媒介にナクバ以前のパレスチナ社会を想像し再構成しようとする作業は、決して単なる過去への回顧にとどまることはないだろう。

V. おわりに

現在のイスラエルには、一方で I 節で取り上げた「ハンセンの家」のようにアラブ・パレスチナ人の存在の痕跡や記憶を抹消する操作があり、他方で III 節で取り上げた刺繍展のように、不都合な存在を過去の〈記憶〉へと変換するという操作がある。現実的に言って、こうしたありようにパレスチナ人が直接抗することはひじょうに難しい。

また時間の経過や世代の交代とともに、記憶の抽象化自体は、ナショナルな〈集団的記憶〉を保持し続けようとするパレスチナ人自身の営みのなかにも必然的に起きている。それは「忘れない」ための行為が記憶の選別をもたらしてしまうというパラドクスであり、失われたものが何であるのかの記憶そのものが結果として失われるという皮肉に満ちた結末かもしれない。こうした問題は、パレスチナ人だけが抱えているのではなく、虐殺など集団的な悲劇を体験した社会のなかで、生き残った人間や次世代の人々が共通して抱えるジレンマであり、戦後日本の文脈では沖縄戦の記憶をめぐる問題がただちに想起されよう。それは、その存在が当事者たちに意識されることさえないかもしれない、あるいはそれについての表現手段の獲得されていないジレンマであり、だからこそそこから逃れるすべが容易に見出されることはない。

しかし少なくともタウフィーク・カナアーンが収集・記録したパレスチナ社会や文化の記憶は、ナショナルな言説に完全に回収されることのない幅をもち、またシンボル化されることで陳腐化

¹³ ナクバを直接経験した人々の高齢化や死去に対する危機感の高まりのなかで、とりわけ2000年代に入ってから、ナクバ以前に存在していたパレスチナの村や町についての情報や、ナクバに関する証言の集積が進んだ。ネット上でもっともよく知られているのは、約600本、総計3000時間におよぶインタビューの動画を掲載している www.palestineremembered.com である。ナクバに関するオーラルヒストリーに取り組むための啓発書、証言を聞き取るためのマニュアルなども NGO などが刊行している。高校での授業の一環や自由活動として、証言を聞き取る取り組みも活発である。

や平板化を導くような作用を受けつけない奥行きと多様性をもつものとして、私たちの前に残されている。

参考文献

- Benvenisti, Meron. 2000. *Sacred Landscape: The Buried History of the Holy Land since 1948*. University of California press.
- Canaan, Tawfiq. 1931, 1932. The Palestinian Arab House: Its architecture and folklore. In *Journal of Palestine Oriental Study*. 223-247(1931), 1-83(1932).
- Fuchs, Ron. 1998. The Palestinian Arab House and the Islamic 'Primitive Hut'. In *Muqarnas XV: An Annual on the Visual Culture of the Islamic World*. Gülru Necipoglu (ed.) Leiden: E.J. Brill, 157-177.
- Israel State Archive. 4986/42- 2
- Kawar, Widad. 2010. *Threads of Identity: Costumes and Traditions from Palestine*. Rimal Publications
- Mantoura, Leila. 1998 Father, Friend, and inspiration. in *Ya Kafi, Ya shafi... The Tawfik Canaan Collection of Palestinian Amulets*. Birzeit University.
- Moravian Archive, 2010. This Month in Moravian History. Issue 54, June 2010.
- Nashef, Khaled. 2002. Tawfik Canaan: His Life and Works. in *Jerusalem Quarterly*, November 2002. Issue 16.
- Pappe, Ilan. 2006. *The Ethnic Cleansing of Palestine*. One World Oxford.
- Tamari, Salim. 2009. *Mountain against the Sea: Essays on Palestine Society and Culture*. University of California press.
- Trust Society, 1946. *Periodical Accounts of the Work of the Moravian Missions*. Trust Society for the Furtherance of the Gospel.
- Weir, Shelagh. 1989. *Palestinian Costume*. The Trustees of the British Museum.

خشان, محمد. 2012. الخط الشمالي. منشورات الجمل.

سرحان, نمر. 1977. موسوعة الفولكلور الفلسطيني. البيادر: الأردن.

- 犀川一夫、森修一、石井則久 2012年 『世界ハンセン病疫病史 —ヨーロッパを中心として—』 皓星社
- 田浪亜央江 2016年 「タウフィーク・カナアーンの民衆信仰研究とパレスチナ文化復興運動」『変わるイスラーム社会 宗教と紛争の実態』所収、明石書店（近刊）